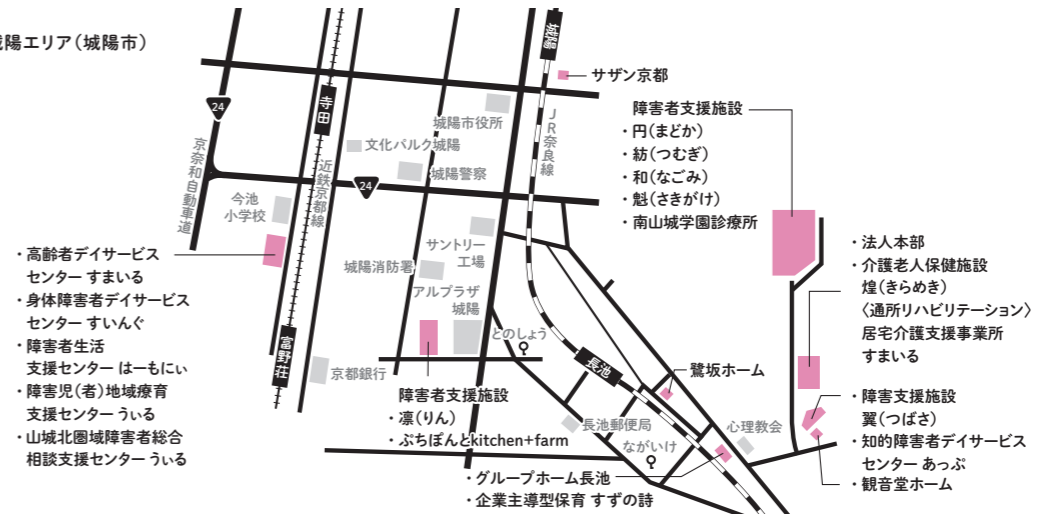


特集

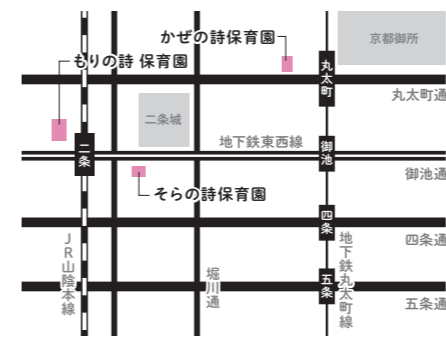
障害者の多様な生活と介護のニーズに対応する  
「暮らしの場」の整備



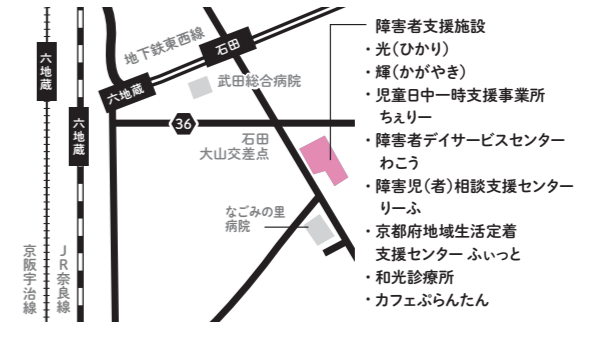
### 城陽エリア(城陽市)



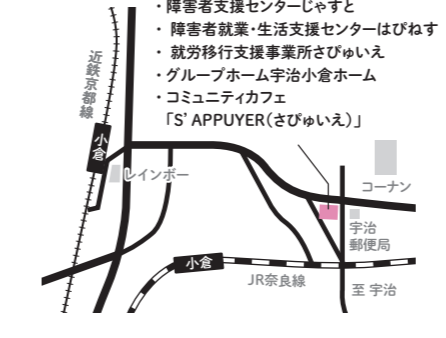
### 京都市中京区・下京区エリア



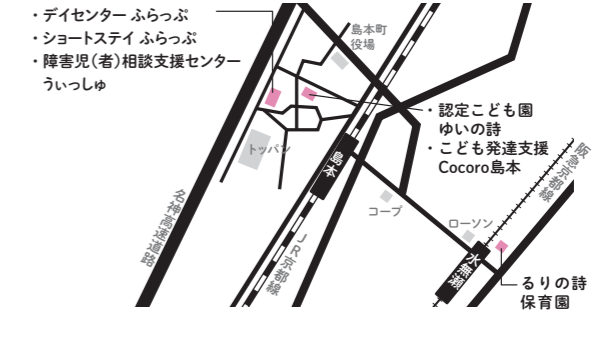
### 醍醐エリア(京都市伏見区)



### 宇治エリア(宇治市)



### 島本町エリア(大阪府三島郡)



### 編集後記

今号は「暮らしの場」をテーマにお送りしました。編集部でもこのテーマと向き合い、それぞれのコメントを編集後記とさせていただきます。

暮らしの場。平穏な場なのだろう。ある人が言う。自分を安心して表現できる場が必要だと。その安心の場、当たり前のようで、当たり前でない。ふとした時に、考えてみると、安心をともにすることができるようだ。(S1)

ここ2年間のコロナ禍で、様々な時間の過(し)方を改めて考えさせられました。「暮らしの場」を整えることは、ひとつでもいい、自分や誰かのために工夫することの連続なんだなあと、日々のなかでつらつら。(AS)

暮らしの中には、「見えない師匠」がたくさんいる。ひょんなことから近所のおじいさんと立ち話をすれば、実は畑の達人だったり。もらったぶん、自分も何かを交換したくなる。そんな出会いが、暮らしの土壌を肥やしてくれる。(M)

自分が住む場所を選ぶとき一番重要視するのは、空が見えるか、カーテンが開けられるかどうかが必要条件。部屋から空を眺めながらソファで寝転ぶ幸せ。暮らしの場に、安心・安全がベースにないと暮らし方は選べない。暮らし方を選べることは平和で贅沢なこと。暮らしを大切にしたい。(KK)



## 私たちが考える「暮らしの場」の整備。

### 継続的に取り組む 知的障害のある高齢者の支援

法人理念の一つに「利用者様の尊厳を守り幸福を追求する」とあります。南山城学園は、昭和40（1965）年の創設以来、利用者様一人ひとりのかけがえない人生に寄り添い、共に幸福を追求する支援を行ってきました。それは、どのような障害があろうとも、その人らしい生活の実現を、寄り添いながら共に追求することを大切にしたい実践です。創設当初、30名だった障害者支援施設の定員は、現在では8施設約400名となり、日々さまざまな障害のある利用者様への支援を行っています。こうした状況の中、継続的に

取り組んでいるのが知的障害のある人の高齢化への対応です。

### “生きがい”に焦点をあて その人に合う支援を实践

日本は、平成6（1988）年以降、急速な高齢化が進行し、現在では総人口の約30%が65歳以上の高齢者という超高齢化社会です。南山城学園も例外ではなく、利用者様の高齢化が進んでいます。南山城学園では、高齢化の進行がはじまった平成11（1999）年に、高齢化する利用者様の支援を中心とする『和』を開設しました。生産的な活動を中心とした日中支援を見直し、高齢期を迎えた利用者様の“生きがい”に焦点をあて、その人のペースに合わせた支援へと変更。その活動の一つである“造形”は、市内の文化施設での作品展『という展』として定着し、今年で10回目を迎えました。のびのびと自由な感性でつくられた一人ひとりの世界観が際立つ作品は、ご来場者からも毎年好評です。日中活動と並行して、利用者様の身体状況の変化にも専門的な対応を進めています。

### 心身両面の支援だけでなく 住環境の改善も推進

高齢となった利用者様の支援を担当する職員の多くは、介護福祉士を取得し、また、地域のリハビリテーションの専門機関と連携した研究会を開催するなど、心身両面からの支援を実践してきました。しかしながら、高齢化が進んでいく利用者様への支援は、工夫を凝らした心身両面からの支援というソフト面だけでは限界があり、住環境の改善が急務の課題に。そこで、令和2（2020）年、きめ細かい支援体制を図ることを目的として、定員79名だった『和』を二分割して『紡』を併設。加えて、全世界的に広まったコロナウイルス感染症の緊急対策補助金の活用により、多床室から個室へ住環境の改善を推進することができました。

### 高まるニーズに きめ細やかに応えていく

こうした取り組みは、1970年代に提唱され、高齢者支援の分野で注目されている『Bio-Psycho-Socialモデル』

## 障害者の多様な生活ニーズ、 介護ニーズに対する「暮らしの場」の整備

時代の状況に応じて変化する地域社会とともに、社会福祉のニーズも変化していきます。いま、私たちには、社会から何を求められ、どのような支援が必要とされているのか。そのことを問い続け、日々変化するニーズに応えるのが、私たちの使命です。今回は、近年においてニーズの高まりをみせる高齢障害者の支援について考えます。



に通じるものがあります。健康状態であるD、心身状態である意欲、社会環境である住環境などを総合的な視点から関わるのが、法人理念にある一人ひとりの利用者様の、幸福追求を実現することにつながります。今後、さらに高齢となった知的障害のある人へのニーズは高まっていくと予想されます。南山城学園が持つ機能を最大限に活用し、ニーズに応えていくことが法人の使命であることを自覚しながら、取り組んでいきたいと考えています。

※『Bio-Psycho-Socialモデル』：患者やクライアントの状況を生物学的な面（Bio）、心理学的な面（Psycho）、社会的な面（Social）という3つの側面からとらえ、問題解決を図ることが望ましいとする考え方。



## 国立のぞみの園との共同研究 「知的発達障害者の 高齢化を考える」

共  
理  
解  
と  
向  
け  
て

### 高齢障害者が 安心できる暮らしを

近年、高齢障害者への支援は、さまざまな方面で研究が進められています。研究が進められる背景には、急速にすすむ高齢化の現状があります。現在の福祉施策では、年齢が65歳に達すると介護保険が優先的に適用されますが、障害福祉サービスを利用している知的障害のある高齢者は、慣れ親しんだ環境から変化することへの対応が難しいケースが多くみられます。そのため、障害福祉サービスを継続することとなりますが、しかし、障害福祉サービスは高齢者を対象とした制度でないことから、住環境をはじめ高齢障害者の安心した暮らしには工夫が必要になります。こうした状況が、高齢障害者を対象とした研究が進む背景であると推察します。

### 共同研究に参画し ライフマップを作成

南山城学園では、独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園（以下「のぞみの園」）を中心とした厚生労働科学研究（障害者政策総合研究事業）「障害者の高齢化による状態像の変化に係るアセスメントと支援方法に関するマニュアル作成のための研究」に、マップ作成ワーキンググループのメンバーとして参画しました。本研究は、知的、発達障害者の高齢化に伴う変化の実態について把握し、若年期から終末期までの心身の状況や支援について概観できるライフマップの作成を目的としています。

### 利用者様との関わりを 記録する重要性を再認識

参画した障害者支援施設「輝」施設長山口嘉信は、この研究について次のように期待を寄せます。「私自身、高齢期を迎えた障害のある利用者様と関わる

中、支援の難しさ・視野の狭さを痛感していました。そうした中、ワーキンググループメンバーとして研究に参画し、多くの事例と向き合う中、記録の重要性を再認識しました」。記録は、支援者が関わった瞬間と瞬間の積み重ね、つまり利用者様一人ひとりが生を営んだ歴史そのものです。その記録が、その人の生活の営みに大きく影響しているのです。高齢期を迎える利用者様への支援を計画するとき、その生活を営んだ歴史（記録）は、重要な情報（手掛かり）となり、そのためには、適切な情報を記録として体系化することが必要です。こうした研究を通じて獲得した成果は、これから高齢期の支援の準備に向き合うご本人・ご家族・支援現場にとって、大切な手掛かりとなります。高齢期を迎えた利用者様が安心できる暮らしを支えるために、日々研鑽していきたいと考えています。

### 実践者として関わり 専門性を高めていく

高齢化が進行する中、ますます高齢障害者への支援ニーズは増加していくと予想されます。また、認知機能の低下やパーキンソン症状など、高齢者特有の疾患や症状が加わり、安心した生活環境を整え、その人らしい暮らしを継続するための支援には、専門性の獲得が必要になります。社会福祉の臨床現場の職員には、省察的実践により専門性を構築することが求められます。今後もさまざまな機関が実施する研究に、実践者として積極的に関わり、専門性を向上させていくことが、私たち職員には求められていると考えています。



## 地元の伝統産業の 一役を担うよしず作り

生  
ま  
ぎ  
れ  
が  
い  
る  
場  
所

障害者支援施設「和」（なごみ）では、利用者様が活躍できる日中活動を探求していました。そのような中、地元のお茶農家が、よしず作りの担い手が高齢化のために減少しており、伝統産業がすたれてしまうことを危惧していることを受け、2016年からほんず（※）活動を導入しました。日中活動へ導入するにあたり、職員がお茶農家に学ぶところから、実際に利用者様に取り組んでもらうまでの流れをご紹介します。

※ほんず（栽培）  
葦の茎で編んだすだれを用い、茶葉への日光の当たり方を調整する碾茶の伝統栽培方法のこと。抹茶の原料になる碾茶は城陽市の名産品。和では、全国茶品評会で最優秀賞を得た農家からよしず作りを受注している。

### 1.職員が農家から学ぶ

#### ①使用する器具を用意する

作業台  
編み作業に必要な8本の紐の先に付けるおもりの槌は、内と外のしまり具合を調整するために重さが異なる。背の低い利用者様が取り組めるようにオーダーメイドで改良を重ねた。

#### ②編み方を学ぶ

数ヶ月かけてお茶農家から直々に伝授してもらい、どう説明すれば利用者様に伝わるか議論する。

### 2.利用者様が興味を持たれるように促す

#### ①活動の見学会、体験会を開催

個別でアプローチを重ねる。

#### ②利用者様それぞれに適した作業を振り分け

#### ③利用者様それぞれに適した作業時間を振り分け

（作業効率の上昇）

[2016年]110枚 [2017年]200枚 [2018年以降]300枚

利用者様は、ほんず活動を導入する以前、時間を持って余して活気の少ない生活を送っておられました。活動を始めてからは、自らの役割に強い責任感を持たれており、休日に「はやく仕事をしたい」と職員に話される方もおられます。この活動を通じて、地域とのつながりを持ち、伝統産業の一役を担うことで、それぞれの方が仕事へのやりがいを感じ、生きがいにも繋がる特別な活動になっています。利用者様と職員共に、地域の困りごとなどを我が事としてとらえ、共に生き支え合うことへの意識がより高まりました。今後とも、利用者様がさらに活躍できる場を地域の皆様と一緒に考えていきたいです。



↑作業風景  
葦は近江八幡市で仕入れ、皮をむいて長さを調整。手作りの編み機に1本ずつ重ね、2本のロープを交差させて縛り上げていく。縦約3メートル、横約1.2メートル。

### 健康を支える取り組み セイダ式口腔ケア



知的障害のある利用者様の高齢化に伴い、口腔機能の低下による誤嚥性肺炎のリスクが高まっています。そこで着目したのが「セイダ式口腔ケア」です。障害者支援施設「紡」(つむぎ)では、2017年度に職員がセイダ式口腔ケアの研修に参加し、口腔ケアマイスターの資格を取得。その後、事業所内での伝達講習を行い、対象者一人ひとりに合ったセイダ式口腔ケア方法を確立し、2018年度に導入しました。

#### 1 お食事全介助の利用者様に、口腔機能向上を目的としたマッサージ

- ① 毎食時、口腔ケア用ウェットティッシュを使用し、口腔内を拭きとる。
- ② 舌ブラシを使用し、舌を掃除及びマッサージする(週2回)。
- ③ 口腔内用ジェル(シルクの力)を使用し、口蓋をマッサージする。

#### 2 口臭改善のための歯磨き

- ① 歯みがき粉(ハイライズ)を使用し、歯を磨く(週2回)。
- ② 舌ブラシを使用し、舌を掃除する(週2回)。

③ 義歯も①同様に磨く。

#### 3 誤嚥性肺炎予防のための歯磨き

- ① 歯みがき粉(ハイライズ)を使用し、歯を磨く(週2回)。
- ② 義歯も①同様に磨く。

毎日のケアでの観察と口腔内のチェック、動画、画像での定期的な比較検証し、研修委員会にて評価しました。(結果)

- 口臭数値の低下
- 口腔内の動きが活発になり、嚥下までの動きがスムーズに
- 残渣(食べかす)がほぼゼロに

このように、口腔内の改善、誤嚥性肺炎の予防につながっています。改善を実感したことにより、口腔ケアに対する職員の意識や技術も向上し、口腔ケアは利用者様の健康に直結していることを理解しました。今後さらに法人内診療所の障害者歯科専門医と情報共有、言語聴覚士や理学療法士との連携を図り、医療専門職の視点を加えたより正確な評価方法を用いて、より個別の口腔ケアを実施していきます。

### 落薬ゼロに向けて



高齢の利用者様は毎日何らかのお薬を服用されています。服薬の管理を含めた支援は、利用者様の健康管理において必要不可欠なことです。紡では、薬関係の事故のなかでも頻発する落薬に着目し、PDCAサイクルに基づきヒューマンエラー発生の要因を分析、改善策を講じました。

- 1 責任の所在の明確化
- 2 薬カート、置き場の改良
- 3 薬包を破棄するタイミングを変更
- 4 お薬キャッチエプロン※の導入

※エプロンの説明  
利用者様の体型に合わせて口元からエプロンまでの長さを調整。エプロン内に落ちた薬が見えやすい色に変更した。着けることに抵抗が少なくなるよう食事時から着用していただく。

#### 5 服薬シミュレーションの実施

過去の落薬事故データを分析し、事故を起こしやすい状況での服薬シミュレーションを実施。

職員一人ひとりが意識し、「互いの支援を点検し合う」という取り組みを継

続することで、自らの介助時のクセに気づき、意見交換することで確認動作の共有と理解につながることができました。まだ落薬ゼロの目標を達成できていませんが、ひとつの課題に組織的に向き合い解決していくプロセスは、今後様々な課題解決に活かせるものでもあります。今後もこのプロセスで得た「取り組みを発展させるチーム作り」、「当事者意識を高める」、「議論を継続する」3つの点を大切に高齢期の利用者様の健康で笑顔あふれる暮らしを追求していきます。



服薬支援エプロン装着

服薬シミュレーション